

ル2
3393
2

赤尾記

赤尾元景

天保十二年

...

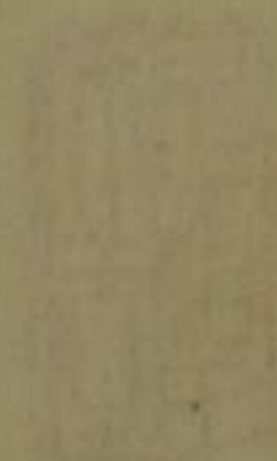
...

...

...

...

...



< 2000-194(2) >

漂巽紀畧卷之二

川田維鶴撰



傳藏兄弟苦楚歸朝之畧

天保十二年辛丑歲筆之丞等オアホ止島來り
 一々土様と加んが島推鴉燭島七十餘里ありし
 て五十浦あり其港とソーハツホ止と名つる在
 うらひメリと等諸船舶を祀り錨を下し天候
 と待み処と寸首府港頭よりハナロロと云近
 二三年來メリケキアリフ子金山開ちしより益々
 休船の要知とらり彼地より往來するも必は船

と云れり船せざるりけし故に西洋及漢の諸州
より新に星貨^{ニモリ}綿帛^{ウケセ}鋪と云ふ一年くより殷賑^{ウレ}戸
數凡二千余烟とり池り府内島王^{キニカケ}オカ
し城塞^ウり造堂堅固りして宏大りる樓閣と
設者其第一層と遥望すふと潤些數百人と容べ
し塞外に宰府^官ツワハツカ十^イ上等の第宅及
以^ラブラン^シり来住する処の刹城^ウり製造^ス
完好中の石蓋の高樓を作り窓間悉く硝子を亮
隔り其清洒比するもりりし次府南瀕り何
りカカと云^濱り人家千と云て数へ午道^イ魚

市^ウり^レバと^ソ繁昌尚首府り讓り此
地赤道近辺りりと虽も氣候甚た炎熱りり然
本州暮春初夏の際りりし寒暑の變^ウ心を用ひ
是と察せり其變交を知りりし能く改^ス
土人他邦に往行せりりもり霜雪り何りり
祀也次雷鳴り如りり稀に遙遠の地り響^ウりり
りりり風り常平丑寅りして隅他位りり吹来
りりり河^ウ忽り雨と醸りりり久^ウりり
て丑寅に轉り来北に必晴天に復り其人物の面
色^ツ黄^シ禍^シりして身軀長大目皆下垂^{土人}り^五石^制つ
り^戯り^日

本及漢土の人々目眇此れをこくと割たりとて手
うて逆り引上げ矢ひ此れハ五石彫つハ洋外人
等ハ此れをこくとて骨尾と
曳下けりてしりてしりて
毛髪ハ黠黒うして頭
みて剪み女子ハ項うて束好んで種こり粧を
りし面部ハ胭脂を施すことりして自然艷色
と逞し〜次言詞ハ過多^{トク}メリケル原くと魚も自
然ノ島訛り陋語多し其人多くハ能客も厚情と
加へ編み節義^{トク}と尊へり幣錢ハコトイッス
テ止メリケル金錢銅等を用ひ常食ハ牛肉魚餅
と除め外土産ハ芋類と餅の比に製し皆之と鐵
碗ニ容じりてしりてしりてハ指頭もつり

用て喰ふ其他烟艸と嗜み此れと喫又口に入池
これと服す酒と賤むこと汚穢を厭ふからし
狗木皮と唾で汁を出し自ら酪丁するもり有り
て或ハ此れを愛玩次衣類ハハロトハワエロト
等と着す家屋ハ製ハ磚牆^{イシ}磚蓋^{イシ}木造^キ檯蓋^{イシ}して
木造りもハ藍赫と諸色と壁及び床と彩り土
と綿布と敷き掲し寄て以て常居とせりうても
葦之巫等淹^イ苗^イ数月りりち此れハ洋外人等声音り
異り故りやアテノ^イと云名改呼りと然り
きハ葦之巫ハ其叔父の稱と襲ハ葦て傳藏と通

稱せり

十三年壬寅歲「オアホ」止り五月日本攝津兵庫人
善助昨年二炊奴一名と携へ尋ねたり先年船
衆十三人と以て齋物分明阿波より江戸渡海
次暴風より漂り此「イシバニ」止り船を救ふれ彼国
行き十一人ハ樵薪汝業とし吾等ハ一富家金り
ハ此家許多の洋船と撃に肆と聞に四方へ貨
賣す吾彼土の人情の向背と暗知し言語の通聞
と些少此文字も解挙并附簿等事用と加功いんげんち消
光すはるる主人言やうハ吾ら三女所好し忘り

一女と娶すべし中一此土に止りハ没齒少く見
捨りし下り勸られども原来帰朝せんと思ひ
らみしとり水ハ其意もりら終り固辞あ
る會に漢土田易船行りて「メリケ」より来れり主
人より十三人々うち吾輩五人の爲り附乗と乞
ひ因て漢土より返朝せむとほつ凡計ら次も此
港口より入来たり不思いんげん日本ハ人在住す所と
謁見と請むと上陸し来たり外三人ハ猶船裡に
在然し初免乗船のとき一人より銀錢百枚ハ運
費と定め船頭より賓客の礼と以てせんと堅約

ク、リ、リ、リ、此頃に至り大に前約す背に却て不敬
うして殆ど打擲して驅使せしむる及、子等
若帰朝りさんと思ひたまへ供に附船ふし吳
と一人うても日本人益んといは吾輩の幸とい
より甚しにことなりしと最も祈むるを語らる
る傳藏念ふやうに此便に善助と帰朝せよば予
も一人の事とせしむると善助の言ししと以て宿
所へ福ありと云れ、吏乃ち折簡して彼船へ請れ
られ、船頭許諾せ、次善助も氣を毒がりといふと
意を任せず云下り、八人の事不問ハハシ、不

巧く若此地へ航し来りて河池に哀憐を加へ
給ふ事ありと供に別を惜みけり、善助ハ容貞賤
からり、次性極
て溫柔筆端に業り、其故り、之彼地りても、
用せられ、金にて製せし貴人の肩に、
釣出たり、景
後と、見たり、傳藏等思ひ立し、もか、
は
錢贈せられ、齋らせり、傳藏等思ひ立し、もか、
は
次既り善助り別れ、後ハ、
只、
無、
用、
り、
り、
水、
ハ、
或
ハ遊行ふも中紀或ハ最小の舟魚船を放り土人
七八名と俱り三五里の海濱へ出本州海上り用
申了、短、
長、
竿、
を、
用、
つ、
て、
招、
き、
り、
し、
と、
釣、
り、
折、
り、
し、
過分の獲物、防、
社、
バ、
市、
虚、
ニ、
是、
と、
賣、
貨、
セ、
し、
ッ、
ッ、
ア
木、止、
り、
人、
等、
傳、
藏、
等、
奇、
竿、
を、
以、
て、
多、
く、
得、
つ、
は、
と、
感

歎セリ「カカハ」ハ「采地三里余外」村落「可」
毎^毎取^取支^支米^米と取り行事「可」為^為其^其勞^勞と加^加又^又采
地^地「カカハ」ハ「采人住居して農を業と次」と
の「可」或^或ハ彼^彼家^家「行厨間」水^水丁^丁燭^燭者^者と助^助者^者
して養^養育^育の恩^恩と謝^謝「淹田」地^地「言語」も略^略通
「少」は「可」し「可」ハ「人の傭丁」とり「少」は「作業」と
して生活^{生活}セ^セ人^人と主人^{主人}「其意語」々々「地」ハ「吏長」よ
り長^長く金^金藏^藏置^置ちとの令^令「少」は「煩」ハ「吏故必心慮
と勞^勞セ^セ次^次して此^此終^終送^送光^光「少」は「し」とて遂^遂「可」聞^聞得^得
ず更^更「手縁」を求^求「少」ハ「吏長」ハ「可」は「右」ハ「逐件詐

ハ「可」ハ「即ち免許」を得先^先頃^頃医^医と業^業とセ「少」ハ「スツ
又「少」ハ「今」ハ「官人」とり「少」ハ「カウ」ハ「革
稱^稱「取」ハ「恤」ハ「加」ハ「れ」ハ「可」ハ「即」ハ「給事家相
託^託「少」宗^宗族^族舊^舊故^故り「各」ハ「處」ハ「傳藏」ハ「シ」ハ「シ」
止^止「少」ハ「彼地」ハ「尊稱」して「少」ハ「是」ハ「則」ハ「名」ハ「は
ハ」ハ「云」ハ「リ」ハ「ケ」ハ「リ」ハ「来」ハ「リ」ハ「塾師」ハ「少」ハ「人」ハ「家」ハ「仕」ハ
重^重五^五右^右衛^衛つ「少」ハ「オ」ハ「ブ」ハ「ニ」ハ「カ」ハ「ウ」ハ「込」ハ「仕」ハ「五右衛門」ハ
以^以「少」ハ「若」ハ「少」ハ「用」ハ「任」ハ「次」ハ「少」ハ「能」ハ「ハ」ハ「池」ハ「は
其^其兒^兒と保護^{保護}す」と命^命セ^セ「少」ハ「寅」ハ「右衛門」ハ「匠家」ハ
傭^傭「少」ハ「遂」ハ「其技」ハ「學」ハ「少」ハ「總」ハ「洋外諸州」ハ

七日く、土の寺院にて「ジョンレイ」と云祭祀あり
 海船中にも此 午刻より衆群来會し住持檀と設
 祭祀ハ廣セバ け壇上へ「タリス」と云ハ小麦粉と油より練るは
 餅を供へ衆に向ひ説法レ其説ハ淳屠の美りて
 もりし夥くハ國々法令を説き五常の道と諭せ
 り此祭祀大抵一 小四度あり我邦の五節句の
 美りて人皆休業遊觀の日ありて門戸を鎖し
 郊外に歩行セざるものよし「ジョンレイ」の翌一日
 と「ホアカ」と云二日と「ボアル」三日と「ボアコ
 」「四方」と「ホア」五日と「ボア」六日と「ボア」モ

ワシダラ 銀 錢



量四文目八分 邦價一貫五百文代

ハスダラ

量二文目四分 七百五十文



コワダラ

量一文目二分 三百七十文



ワシエン

百八十七文半



ハスエン

九十三文六分



ゴール

錢金



ゴール



シエン

錢銅



ロロ七日まゝ「ジョンレイ」と復つる此を四周一たる
 もの一月那に故に備貨等の類りとも四「ジョンレ
 イ」を池け与ふゆりや九月十月の際右の祭祀何
 事傳藏其折「マ」リ之船日本人二名を乗せ
 「サソ」ハツ木止に歌泊すところ
鳥童等食物類
と商賣を爲す
 為り小艇を乗泊船を往來次故に此のふと
ここを聞するに其草の傳はる
 港
 口
 きて上所の人何れを何れも船りや問はんと
 思いつ、歩して任せて埠頭を出たりしに偶たま
 一ハ巨船より技船を乗来り人何れも面容日本人
 中へ呼かくまはば彼人も傳藏を見て驚然として

走り来り子ハ日本人ヲらす也吾ハ江戸人安大
郎と呼者リ年二其初塩載の船ヲ乗衆八人
と陸奥より江戸帰帆の路次漂流し洋中在る
と一年計ありて糧米ハ絶えとり種々心と碎
き食物と謀れとも海央に在て何の工夫もな
りしと天助りしや鮫魚さつの群に逢ひし鮫を釣得
乾肉として喰ひし鮫とも以つて續くやしも
終り大人ハ餓渴と苦しみ存命て藤兵衛ふじゑ
漁人と吾とのみ余りししうまりし鮫船さつせんヲ為
し助らぬ死人ハ倒卧のまし船と供に廢棄彼船

より上り此土迄来りたり子ハ邂逅てんじんす
らむ急き藤兵衛よりあつと語り聞せんとて
牛肉些少賒得て船とて歸りけり未久まひして
安太郎藤兵衛ねん十有年とと偕りて来り俯原儀已
了し俱に傳藏の旅舎に到り藤兵衛云やハ
吾輩乗船の頃一妻三兒を携たり吾輩ハ彼三
兒の戯弄わいごに倍するるとと命せられ居あるが
の船歸朝し便りし花ハコランし船漢土に濟り
もの何し船頭為し彼船ハ託し吳他日此へ遷ら
んとするつ次子等能洋外の言語を解子若附乗と

與ニセんと欲し給り行て自から請終ふべし
として借し船ニ入船頭ニ對し藤兵衛の言をもつ
て請多れハ船頭ハ巴と二人と許しぬれハ此上
ニ乗衆加ふ可なりとて可うに傳藏ハ運費さ
へ先へ与へり必聽從^{モウシヨウ}行。つに何の代もな
きふとりれハ是非ありとて起上りハ藤兵衛等
推止ぬ彼鐵死六人の衣類京縞^{キョウセウ}して製したるを
出し價をれし呉れんと計れとも和製の服洋外
ニ用申べかりしれハたえて賈客^{カウ}より更り船ニ
上り敢て清へとも容れん^ハ
傳藏等船の上るふと
敷くふりりる中あも

食ふりとも^ア下りとも^ア何り多れハ船上の
炊具等られと潜し怒るといふも^ア管せぬやるり
と期しりぢりも^ア分り別と決取りりれハ幾もりし
藤兵衛等「ブレン」し船ニ乗かへ卒^ハ馬頭^{ウマカウ}を登せ
り
弘化元年乙巳歳重助ハ往年無人島して痛り
脚全く復常^{フクジョウ}され遂に跛とりり其延より登せし
もりりや不圖帶下と患ひ日りられ不治の症
とれきり「オブニ」カウ内為る看病の費を惠みく
れ万更心を用ひりれりりり時傳藏五右衛
門に對し謂曰吾願くは重助を治療を加へせし

助命し与人とほつすといふも今ハ医とひきこ
祝ハよき品ハ茶種多しふの地と距るうと三余里
り一村落のりり名呼てゴリラといふ良医某
氏多病人りり子等重助と携へゆといて救助と
乞ふといと即肩輿と買来り「オブニカウカ」等と
拜辞し重助と昇「ゴリラ」して急きゆりり
とゆりり一里りりり前路りり馬と曳来ゆりり
り傳藏等と見て捧して曰吾ハ「ゴリラ」の者なり
て「オブニカウカ」寄声まゆり子等と迎接り来
りしと云三人ハ是とて思ひゆりゆりりハ大

驚喜し重助ハ已ニ輿上ニ安しりハ傳藏いせん鞭夫
ニ我肩を代りりり自馬のり既ニ「ゴリラ」
に到り「アリーブ」と云人の家ニ投宿す「アリーブ」
闔家四人弟と「テツ」ハ正と云六室と携「アリーブ」
と同居せり傳藏ハ即日彼医史某へ至り「カウカ」
の言を演け祝ハ已ニ「カウカ」の寄言ありとて即
時ニ許諾し乃ち就て治療しりハ医史志懇情
を加へ治術の工夫を精究せり又村中りりり
の寺りり其名を「バリケヤ」と呼山主と「三ツバレ
カ」と稱し元ハ船頭ウリエン「エイケ」アイツ石ール

の隣人有り其由縁を以て丸散等の諸薬を以て
惠賜以其余の事用百端尽く其煩を以てらさる
知りし

二年丙午重助ハ數品ハ良薬百方ヲ療治モ驗不
く「オッアホ」ハ正月上旬「ゴ」ラ之ヲ於て三十一
歳と一期とせり傳藏五右衛門モカと記む重助
と止し涕泣限りふりしが終ふ土地ハ法ハ倣
ハハ此と臥（わ）推（お）異（い）り（り）下（げ）ニ容（ゆる）み寺外ハ一村「カ
ン子才工」と云知し葦北ハ「カ」とも亦来り經
文（の）とふし「（い）」の讀誦（し）ハ此禮ハ引導と与ハ吳懇

切殊ニ限りしりして五右衛門ハ「カ」ケダ等ニ
舎ハ傳藏ハ猶「ブ」ンノ家ト在けるが此頃島
王「キ」ニカケリ「ハ」年毎ハ全島を巡覽次々變ハ
例「ハ」て折「ハ」此村ヲ到リ「ハ」宰官「ツ」ワ「ハ」
「ハ」則「ハ」此「ハ」危後「ハ」来リ因「テ」ブ「ハ」家「ハ」
舎「ハ」偶傳藏と見て安否を問且今ハ如何して消
日「ハ」此「ハ」尋「ハ」此「ハ」傳藏ハ其懇情ハ
と「ハ」捧「ハ」て曰「ハ」や「ハ」春来弟重助死止セ「ハ」り
今「ハ」徒「ハ」然「ハ」して以「ハ」其業「ハ」就「ハ」縁「ハ」を得「ハ」は
能「ハ」次「ハ」顧「ハ」ふ此「ハ」地「ハ」廢「ハ」荒「ハ」頗「ハ」る數「ハ」し吾等之「ハ」開「ハ」鑿「ハ」次

了らむの免許を得んと欲す願ハ君より此を許し
 給とさらんやと語りし北ハコソワテハ此も許諾
 して遂ニ其請処ニ任^{まね}土人を呼ハ百端^{びやくたん}指揮を以
 して之を歸り此ハ衆皆加功して重助墳処より二
 里余外の海畔へ小廬を造りて此近辺の白田畑
 少むりもさし又中野を闢き大芋^{おほいも}甘藷^{かんじゆ}黍粟^{ちみ}瓜^{うり}菜^{さい}
 と栽し日る培養とさしせり元來此地ハ近世
 の新置りルハ一名りて七人の増益して土田等^{とけ}
 開發すふりしと喜け此ハ貢賦も多し耘耕固よ
 り自在なり
 十五歳以上の男子ハコハス父は夜女子ハコ
 ワダニ一枚の口銀取りといへとも傳藏寺ハ其

芭蕉

島人コレヲ芭蕉
 ト云其花ヲ芭蕉
 ト云



蕉實
 色紅黄ニシテ
 其味甘美也

瓢

大ハ三尺以上ノ長アリ
其水ヲ容ルルニ斗
ニ余レリ食物衣服
ヲ貯フル器ト作ル
其産四時共
ナシ



南瓜

大サ高サ尺
已上



口數ニ加はりて其上銀等遂
又納り事ノ令と受給りて
リエンエイ千フツたレレ又此地ノ航り来り漂人
等ハ今ハ「コロラ」之ニ在ると聞たり即ち此村と
尋ね其舊藏々々ハ「ハリケ」寺と訪来りて此日「コ
ンレイ」何して其講席を五右衛門つられし對面
し先互に無恙と相祝し重助ハ死し筆之丞ハ
稱と傳藏と革ハ云々消光と語り又傳藏
と供りし至袂ハ「フツセ」ハ大ニ悦び重助ノ事
を借け万二郎ハ無恙と云へ子ハ此海濱ノ儂寓
すると聞く定て絶勝の地なりと吾も行て訪

とて「パンカ」を携へ寺門を出れハ傳藏先ハ馳歸
リ厰内と掃除し醃菜桶ツケモノの類と並々置歇しやく状じやうヲ代
待居ちれば無窺むそ獲名来リ彼歇林しやくりん寄羨きせんヲ一ひと介
居家作り結構土地リ似合ハ杯さか詭浪きりやう大圓銀二枚
と出シ兄弟へ与へ吳猶惠ごゆうゑまんとほつす由是械
両池ハ五右衛門ハ間暇まひらと盗ぬすハ一二日ハ中ちゆうハ才
ハツホ止へ来り終はつハ一と謂て飯いひりけり翌日
リ至り五右衛門ハ急いそキツオハツホ止り至り「石
ツ石いし」ルハ船と訪たずハ対面たいめんハ昨昔ハ恩おんと謝あやハち
まハ「ツツ石いし」ルハ日子等不慮ふりょハ一ひとて數千里ハ好このハ

漂流し憂光陰を送りしハ一日もく今ハ
本国へ歸かへルハと欲ほツ池いけとも便宜べんぎハ一ひとていま其
志こころハ果はたハ事終ことしゆうハ今茲いま日本海上ハ航かうハ
何なにリ之これハ托たくハ子等こらうと附送つしゆうハ人ひとと欲ほヒ子等こらう減へんハ歸
心こころハ何なにハ急いそハ度たハ一ひとて船ふねハ来きハ寄食きしやくハ人ひとハ
と云外套うわこ五枚ごまい袴はかま五枚ごまい白布しろふ二端にたん及烟巾履えんきんぞうり等らうと施せ
賜たまハれ即すなはチ池いけと拝謝はいしゃハ携たづハ飯いひハ「ツツ石いし」ルハ言こと
と以て傳藏でんざうハ語ことハ共ともハ其尊信そのそんじんと感あはレ夫おとこハ受う
授たまハり地開ちかいハ地皆羊類じがひやうるい裁作さいさくハ前主ぜんしゆ及以故及びこゝろ
家等けらうハ与贈よとぞうハ厰ハ其終廢置そのしゆうはいちて人ひとハ一ひとハ別わかハ告住こくぢゆう

持「ハンカ」へ行記百千の恩と謝し別と告「ハ
「ハンカ」外套二枚手帕一双餞贈せら池け北ハ五
右扇門も俱し是と拝謝し養ふ知り鳥四羽雞六
羽鴨二羽豚二足并し鉄二挺と携へ十月上旬と
つて「ゴ」ラウと離れ「ハ」口「ハ」至り「ク」ム「ク」チ
「チ」等へも別と告「ソ」ツ「ソ」ル「ル」の船ニ上り彼攜こ
へ来り知り「ソ」ツ「ソ」ル「ル」ハ絶て寅右尉つり事を
「ソ」ツ「ソ」ル「ル」ハ或時傳藏「ソ」ツ「ソ」ル「ル」向ひ子等此まを
寅右尉つり傳へ給し「ソ」ツ「ソ」ル「ル」は「ソ」ツ「ソ」ル「ル」首

と振り休彼ハ吾り親し「ソ」ツ「ソ」ル「ル」為し煩ふ心ふ
しと云し傳藏大り「ソ」ツ「ソ」ル「ル」ハ元吾家隣人
「ソ」ツ「ソ」ル「ル」嘗て傭い来り「ソ」ツ「ソ」ル「ル」失風せし如し告し
捨置てハ帰朝し上彼宗人「ソ」ツ「ソ」ル「ル」對し「ソ」ツ「ソ」ル「ル」子君彼と
陪乘すし「ソ」ツ「ソ」ル「ル」清ハ我等兄弟「ソ」ツ「ソ」ル「ル」為し之とわし給
し「ソ」ツ「ソ」ル「ル」拱手して説「ソ」ツ「ソ」ル「ル」ハ「ソ」ツ「ソ」ル「ル」謂す
ハ己「ソ」ツ「ソ」ル「ル」二人而已り「ソ」ツ「ソ」ル「ル」云て托「ソ」ツ「ソ」ル「ル」を
一人を増加し人「ソ」ツ「ソ」ル「ル」難「ソ」ツ「ソ」ル「ル」し「ソ」ツ「ソ」ル「ル」一巨船
亦日本近海へ濟ると聞し「ソ」ツ「ソ」ル「ル」一「ソ」ツ「ソ」ル「ル」彼「ソ」ツ「ソ」ル「ル」
を計り答「ソ」ツ「ソ」ル「ル」して「ソ」ツ「ソ」ル「ル」後許諾の返詞「ソ」ツ「ソ」ル「ル」寅右尉門

も此事を告知せし速に用意せし已に百事
了りたるに實右衛門の借に「オツ」を以て別を
告共に見すべし其の別を借にやがて各
彼船より上りたる借傳藏五右衛門乘實右衛門乘
皆「エ」テイツシテイトメリケの捕鯨船にして其名
を「フライデン」と言ふ頭を「キャン」フシ「ゴ」コレと云
無程出港の際に臨み實右衛門の船首より立ち傳
藏兄弟と鷹と吾ハ未だ上陸するに子等無異に
歸りしとて號ししは傳藏ハ此流と云し何處
の「」ししと駭き行て向ふまは船老等頑侮し

て居安んず可からず故に吾ハ帰朝と休へしと
云し傳藏ハ百方り是を諭せど可くは敢て諫
んとす際を解んと促ば遂に別て船に歸
り無刻布帆を啓ちりふのたに實右衛門の附乗と
乞たる船に此取日本に
た相模州浦賀譽の船也既「オ」アホ止と離れ
しとふの後傳「」しり
藏を申酉に取走らんと教計日ありて「又」ヤ「正」
し「」ラ「シ」ワ「レ」リ「ア」メ「地」り向ふ路次り一裸島
り至る國島多半沙地り一は小の丘阜り合抱
已上の椰子樹此上り林生り椰子ハ樹棕櫚の如
くみして枝條多く葉木末りりて蒲を束ぬるが

如く其實大なり瓢のふとし葉向う垂きて実
外祖皮何れ瘦包皮の如く肉を堅殼^{カウ}の如く人面
似し如く何れて猶两眼一口を具せり殼肉及び液
何れ肉、胡椒のふく液、乳汁の如く水と
食へば冷しして氣を動し且其甘美譬へ難し
水液の量大抵三四合ありて一服之を吞飲し
からす島人の裸体にして婦人の椰葉を綴り僅
り其前門を覆ひ毛髪の後頭を剪鬚髪の後去
男女の糸別陰知を以てせけんハワルルし居
知ハ地を穿上り椰木を編架し椰葉を以て之を

蔽其内を窠^{ドク}巢す銅釜の美り海草を串し貫火
を煨り以て食ひ或ハ椰子の液を喫む故に人皆
椰子油臭あり婦人の椰液を面及び金髪を塗臭
氣^ク何れと責し且其老輝ありじりり傳
再^マ之りりと此土の化粧とす
藏等ハ船稍磯外に及びし島人等男女といは
次悉く椰木の鑿り椰子の皮を編け結つあらず
小船を乗り巨船を目やり操来暫吃し近寄皆相
争て跳入り池ハ船衆等烟中指頭^{ソウ}与へ彼裸婦と
攀^ヒ泥寝し入中ハも衆中の壯者ハ他見と管せ凡
して合歡に裸夫ハ傍り注視して烟中を喫むか

ら陰莖突立て龜頭の跳ねるの所へ船衆或ハ指
さして笑と虽とも絶て之を省しせれさて壯人
等歡喜終りぬまハ裸婦ハ稍羞ふたとと解と見
え脚下と合せ手と腋下うでもと覆おほへり若ら水と見せ
よといへむ鳥渡と脚と閑さ形とさゆしハ陋猥
の妻とりし畑中及び其他食物等乞得ふと以て
此地ハ俗習とりり一日傳藏上陸し破袍垢身よ
して島俗とも少差異り其人よ逢ひ乃ち熟視す
神心「ホッ」アホ山やまして面識ハ人故奇恠きがいなりりい妻
の畧と尋るる彼人謂るハ嘗て罪を侵し此島ハ故

逐せられ来りたり島ハ俗陋習禽獸けいじゆう譲ゆづり受
故畔作いんぱんの美とり次々と汝知り次吾山際土つちの
の地ち就て芋黍等と種栽し椰木と鑿ち尿坑うりけいと
造り土人ハ便汁と集め肥沃ひよくの計りとりしち
といへとも憐あはれし語りあましハ其帯は知り衣と脱ぎ
彼り為よ与ちる都て此辺ハ海島ハ椰子やしのこ
ら快たスレツスルと名れ水みづの穀芋こくご類して食
食たに充つマ

三年丁未歲正月北きたに向ひ「ヲ」ル子こ島の内「キ」エウ
一島ハ港みなと入即日船頭上陸し船僧ぶねう宿し船

衆も又代々旅舎に投宿せり此地好奥にして人烟
榔比のらくとく山美海鮮市とれ其警昌隣島
比つきのものり部中高山大澤らうて薪水固
り乏しからす又米穀と産し耕畔休とせし氣
候亦炎熱りら凡土人の言語衣服の製頗る「オア
ホ」イシハニ止し鬢髻をり爰して船の破損と
補以下旬日本海に臨み八丈島に至り此ハ傳
藏五右衛門つらき亦上陸せしと大り勇け船頭
も珍らしく日本の人物家屋を見得べしとて傳
藏五右衛門護送し未了の状と齋枝船を解し人戸

及び牛馬と牽引耕作の体り見申れりて近者
とも風動波立船と艦は知りし晨より夜に至る
て島を離周匝すも志と居し事と得次第
八丈島と離れ鍼と子丑の位に取野作松前
の地に至り一山端と廻り北に向ひ稍海岸
及ふ処篝烟諸所より起り其さまをこま
りしは此の船衆此を恠底不審しれとも傳藏ハ嘗て洋外船来り
し暇ハ防禦の備りしをいふとの夏聞知し
ら此の烽火の備りしと思ひつゝ省ぬ体
て枝船を卸し宿老と供り上岸し烟の起
知人も

つらんと尋ねぬと傳藏と見えし皆逃去人
影もりち此ハ聲と挙余ハりて日本人ふれそと
呼號ふと雖卒と応りしゆん殿と見つるられと訪
り人りくして唯和製ハ釜竈かまど諸器しよき手熟てじゆりし廢
摺りし蓋しと此と即今道しとりりらん傳藏宿
老う白ハ寂早日本ハ屬國ニ至りたは更り此ハ
此こし残しふきくまよ土人ハ果してふハ巨船こぶねハ恐
れ竈かまどしともハ覺申此ハ本船ほんふね子ハ此岸と離去
りハ土人も出未りハママと云ハハ宿老首と振
りつせしハ渡送書と附子等と土人ハ授土ハ領取書

を得次しと「イツセル」ハ對了語ふしとて容り次傳
藏くわんざうもせんくく復船ふくふねニ至り卒すハ所作と掲か颯
せり頃ハ四月しがつり此とも実嚴じつげんしして海鹿かいろう浮遊
すふ所の影しとて鐵てつと子ハ位ゐハ取路次り鯨
魚數百と漁り行くと五十日ごじゅうにちくくして「ラシラシ洲
ハ正ただシただニ山やま下くだり至いたるまラシラシニ山やまハ近州きんしゆハ大岳だいごくニ
しと年としハ積雪せきせつ其上そのかみり崇たかく遠望えんぼうすふり雪色淡
赫はくりして千里せんり斷絶だんてつと見次みぎられり奥區おくくと窺うかがむ
もハ觸目しゆくもく茫ぼう々々不ふ露ろりして因より日色ひしきと見次みぎ又
晝夜しゆくやと分わかり區くハ偶船ぐふねハ通行つうこうすハ事こと巧たくましハ木片きへ

を撃に舷を鼓ち互に船舶の在るを相糸知せし
と洋面の清浪の外辺土色の濁潮流を別ち船を
よ寄せしむとを得次第感り雪降鯨魚もみえす
しハ船を轉しこしこ山外に泛り此辺ハ斗量ハ小
嶼有り多ハ細樹一二株を生せり此際より鯨を
獲ふらし数尾九月の候に至り西風有り此を直
舳を受脚帆を張り走行箭より疾くこしこハ
巨船も大濤り振揚三晝夜食を炊く事あり此唯
ハチテエブルと云ハ此蒸餅を喫三十日許あり
て東風を轉し鍼と申酉の位を取六日ありて有

アホ止島へ復り来り

